

津山市域における食品ロス削減における取り組み

～地域のコミュニティ連携を通して～

Food loss reduction work in tsuyama-area

Through regional community collaboration

原田佳子¹・美作大学食品ロス削減サークル²

Yoshiko HARADA、Food loss-reduction circle in mimasaka university

1. はじめに

2015年9月にニューヨークで開催された国連サミットにおいて「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された。加盟国の一つであるわが国で2016年に開催されたG7では、新潟農相会議や富山環境相会合で食品ロス削減を重要な課題と位置づけ、同年6月には「食品ロス削減に向けて、食品事業者と消費者、行政の連携による国民運動を抜本的に強化、さらに、生産・流通・消費などの過程で発生する未利用食品を、必要としている人や施設に届けるフードバンク活動を推進する」ことを閣議決定し「日本再興戦略2016」に盛り込んだ。

食品ロス発生と貧困、格差拡大は資本主義経済という社会の仕組みの中から構造的に再生産されるものであり（原田2018）。食品ロス削減を取り巻くこのような状況の中、一方では、ますます貧困や格差は拡大する中、近年、わが国では子どもの貧困が増えている。子どもの貧困は連鎖することが指摘され、フードバンクを活用する子ども食堂が全国的に急速に増加傾向にある。

本稿では、食品ロスの現状と子どもの貧困に関して社会的背景及び、子ども食堂の取り組みに関して概観し、美作大学食品ロス削減サークルが活動当初より「NPO法人オレンジハートつやま」と共に行なっている子ども食堂の活動の経過を報告すると共に、本年2月に子ども食堂の先進県である高知県を他大学と共に

視察し、その後、大学生ができる活動をテーマに交流をおこなったので報告する。

2. 食品ロスの現状

図1 食品廃棄物等の発生量（2015年推計）

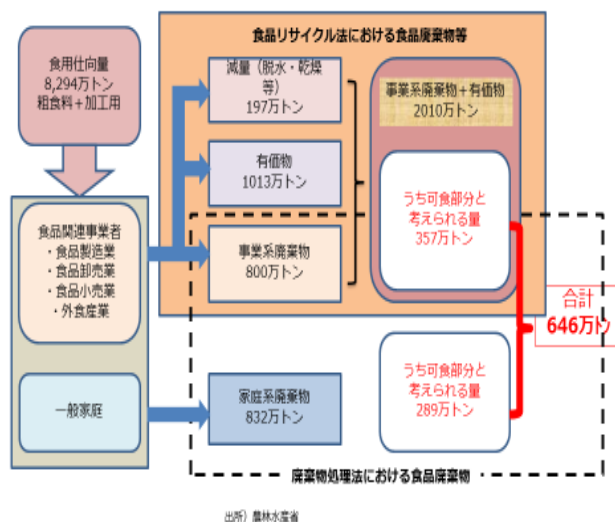


図1は、2015年推計のわが国の食品ロスの発生量である。食品ロスの内訳を見てみると、食品関連事業者からが357万トン、一般家庭からが289万トンであり、合計で646万トンとなる。これは、日本の一年間の米の生産高の約80%であり、日本人一人当たり換算すると、ご飯を139g毎日廃棄していることになる。世界の主な国の食品ロス量と比較して決して多い量ではない（小林2016）が、わが国の食料自給率の低さを考慮すると、食品ロス発生抑制・削減は喫緊の課題であることは言うまでもない。

¹ 美作大学食物学科 特任教授・修士

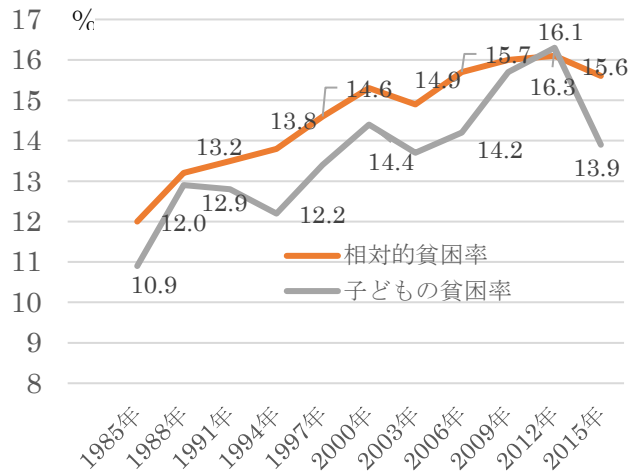
² 美作大学食物学科・児童学科

そのような背景の中、フードバンク活動は活発化し、全国に活動主体が77ヶ所存在する（難波江 2016）。

3. 子どもの貧困

図2が示すように、相対的貧困及び子どもの貧困は増加している。

図2 相対的貧困率と子どもの貧困率



出所) 厚生労働省 2016年国民生活基礎調査

豊かな国の世界41ヶ国の18歳未満の貧困・健康・教育・栄養・格差の分野で比較したユニセフの2017年報告によると、わが国は、総合ランキングで12位であるが、貧困では23位、格差では32位となっている。

図3 日本の子どもの豊かさ



出所) 2017年ユニセフ報告

① 「子どもの貧困」の定義

「子どもの貧困白書」によると、「子どもの貧困とは子どもが経済的困難と社会生活に必要なものの欠乏状態におかれ、発達の諸段階における様々な機会が奪われた結果、人生全体に影響を与えるほど多くの不利を負ってしまうこと」とし、さらに続けて「本来、社

会全体で保障すべき子どもの成長・発達を、個々の親や家庭の責任とし、過度な負担を負わせている現状では解決が難しい重大な社会問題である。人間形成の重要な時期である子ども時代を貧困のうちに過ごすことは、成長・発達に大きな影響を及ぼし、進学や就職における選択肢を狭め、自ら望む人生を選び取ることができなくなる『ライフチャンスの制約』をもたらすおそれがある。子どもの『いま』と同時に将来を脅かすもの、それが子どもの貧困である」と記述されている。

② 貧困の中心は経済的困窮

貧困は多様な側面を持ち、貧困を定義することは容易なことではない。しかし、そのコアの部分は「お金」の問題であることは明確な事実である。

③ 経済的困窮は様々な困難の要因となり連鎖する

「お金がない」という問題は、ただ単に「お金に困る」ということではなく、不十分な衣食住、芸術や文化などに触れる機会が少ない、ITなどの情報機器に触れる機会が少ない、虐待、ネグレクト、学力の低下、進学の機会が奪われる、情緒不安定、引きこもり、孤立、排除、低い自己評価などの様々な不利をもたらす、その不利が複合化・累積し世代を超えて連鎖していく。

④ 子どもの貧困対策推進法施行

2013年国は「子どもの貧困対策推進」に関する法律を制定施行した。目的には「この法律は、子どもの将来がその生まれ育った環境によって左右されることのないよう、貧困の状況にある子どもが健やかに育成される環境を整備するとともに、教育の機会均等を図るため、子どもの貧困対策を総合的に推進する」と記されている。

以上、わが国の子どもの貧困に関して概観した。

4. 子ども食堂

「子ども食堂」が急増している。2018年4月時点で全国で2,286ヶ所以上が認知されている。「広がれ、子ども食堂の輪！全国ツアー」公式パンフレットによると「子ども食堂」の名づけ親は、「気まぐれ八百屋だんだん 子ども食堂」の店主・近藤博子氏である。

「子ども食堂」に定義はない。近藤氏は「子どもが1人でも安心してこられる無料または定額の食堂」と言う。全国の「子ども食堂」の実態に関しては承知していないが、私が代表を務めているフードバンク広島では、多くの「子ども食堂」に食料の支援を行なっている。

「美作大学食品ロス削減サークル」が手伝っている「NPO 法人オレンジハートつやま」での「子ども食堂」の紹介をする。

- サークルメンバー数6名
- 毎月第3土曜日の昼食のメニューと調理を手伝っている。メニューには、フードバンク岡山津山拠点として「NPO 法人オレンジハートつやま」に寄贈された食材を使用している。
- 季節や行事にちなんだメニュー作りを心がけている。
- 調理後、「NPO 法人オレンジハートつやま」のスタッフ、子ども達と共に昼食を食べ、メニューの説明をしている。食後は、食品ロスに関する話題提供を行なっている。



調理の手伝い



ハロウィーンのメニュー



もったいないの紙芝居

- 2017年の実績
回数→11回
各参加者数→20~25名（NPO 法人オレンジハートつやまスタッフ、高校生、小学生、ボランティア、サークル等）

① 高知県の「子ども食堂」の取り組みの経緯

高知県では、子どもの貧困に関して調査を実施している。その結果、生活保護世帯、児童養護施設、ひとり親家庭の子どもたちの18歳以下の割合が、全国8.0%に比し高知県は12.4%であった。そこで、2016年に高知県の子ども貧困対策推進計画策定し、全国の

「子ども食堂」の広がりを受けて、高知県内で積極的に「子ども食堂」立ち上げの支援を行なうようになった。まず、「子ども食堂」の取り組みの趣旨に賛同する個人・企業の寄付を募り、集まった寄付金や県費を財源とし「高知県子ども食堂支援基金」を創設した。次に、この基金を元に「子ども食堂」開設や運営に関する経費を助成する財政的支援を開始した。

● 高知県「子ども食堂」視察

期日：2018年2月14日～15日

参加者：北九州市立大学、高知大学、高知県立大学、美作大学食品ロス削減サークル 教員、学生、高知県、高知市社会福祉協議会

目的：それぞれの地域で様々な思いを持った学生が「子ども食堂」を運営、または支援している。しかし、その情報はほとんど伝わりことなく運営手法、課題等に関して共有されていないのが現状である。この度、高知県内外の大学の教員、学生が、子ども食堂先進県である高知県の事例を視察交流し、地域を越えた学生間の繋がりがつくり。

日程：2018年2月14日 午後5:00～6:00

子どもの居場所「えいや家」訪問視察

「水曜校時カフェ」訪問視察 試食

2018年2月15日午前6:30～7:30

「楽しく朝食を食べる会」訪問視察

午前7:30～8:30

「子ども広場」川上食品 訪問視察 朝食

午前9:00～12:00

子ども食堂事例発表

午後13:00～15:00

研究者の報告・大学交流及びワークショップ

※高知県にフードバンクは一ヶ所存在するが、現時点では、子ども食堂への提供は行っていない。食料が集まらないのが主たる理由である。

(1) 子どもの居場所「えいや家（えいやか）」



代表者は、寺の住職。近くの特別養護老人ホームの施設を無償で借り受け、夕食のみ子どもに提供している。子どものリクエストにも対応し、地域の住民や大学生のボランティアで運営を行なっている。大学生による学習支援も行なっている。



(2) 「水曜校時カフェ」

現在、廃院となっている診療所の厨房を活用して「子ども食堂」を行なっている。毎週水曜日の夕食のみの提供。バイキング形式で料理の種類は多い。子どもに限らず、大人でも食事をする事ができる。幅広い年齢層が利用している。調理する場所と食事する場所が同じ部屋であり、子どもが調理している様子がまじかで見られる

また自然と片付けなどのお手伝いができるようになって
いる。子どもは無料であるが、大人は300円必要。子ど
も食堂 KOCHI 実行委員会が運営している。調理は地域住
民、学生などのボランティアが担っている。プロの調理
人もいる。



バイキング料理

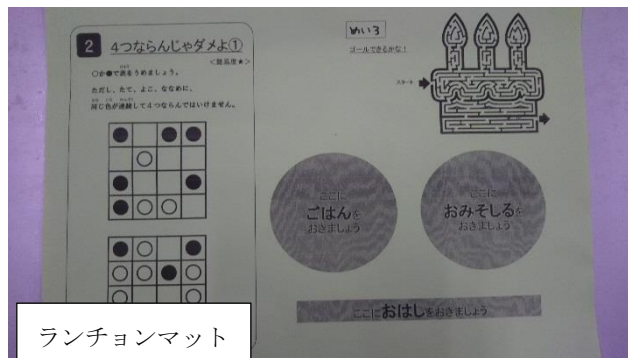


調理の様子

(3) 「楽しく朝食を食べる会」代表 藤原雅道会長
高知市立鴨田小学校の家庭科室を利用し、子ども達に土日
祝日を除く毎日朝食を提供している。朝5時30分に校長が
門を開ける。地域の住民やPTAなどが前日に野菜などの仕
込みを行い、当日6時に集合し、朝食の準備を行なう。



前日の仕込み



ランチョンマット

(4) 子ども食堂 川上食品

川上食品は、弁当の製造販売、惣菜製造販売などを行なっ
ている食品企業である。ホテルの朝食バイキングの料理も
製造しているので、調理品のストックが常時ある。そこ
で、毎日 月～土6:30～9:30 日祝7:00～10:30
食事を提供している。食事をする場所は、現在使用してい
ない職員休憩所を改装して活用している。子どもは無料、
大人と子ども同伴は、200円、大人のみは300円。食堂に
入り、ボタンを押すと担当者がお弁当を持ってくるよう
になっている。ご飯と汁は各自でよそおう。時間制限はな
く、休日には、朝食後、宿題をしたり勉強する子どもたち
もいる。



入室を知らせるボタン



セルフのご飯と汁



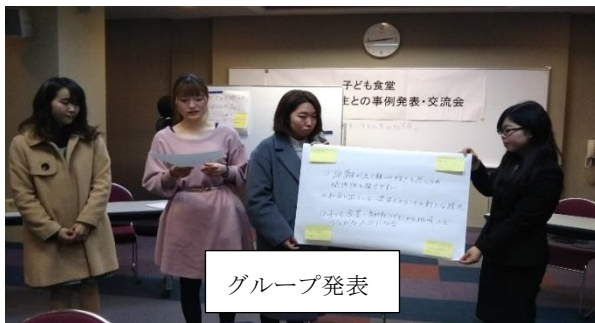
見張りのセンサー



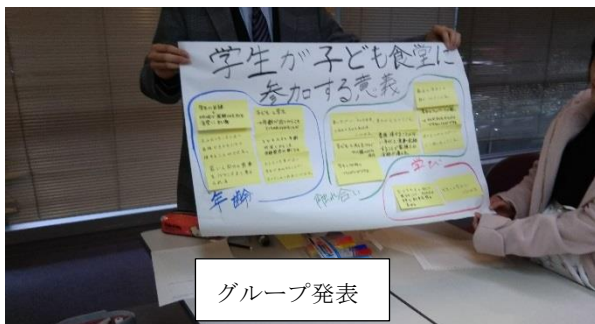
朝食：焼き魚、野菜の煮物、きゅうりの酢の物

(5) 大学交流及びワークショップ
各大学における「子ども食堂」の活動報告を行い、その後、グループに分かれワークショップを以下の項目でおこない最後に、発表した。

- ・ 学生が運営又は関与する「子ども食堂」の意義
- ・ 学生ボランティアが参加しやすい条件
- ・ 学生が行なう学習支援の効果
- ・ 子どもの貧困とどう向き合うか
- ・ その他



グループ発表



グループ発表



全員集合写真

5. さいごに

今回の視察で思ったことは、高知県での「子ども食堂」は、地域のコミュニティの場として機能しており、地域住民や地元大学生の参加が大きな役割を担っている。「子ども食堂」というと、貧しい家庭の子どもや母子家庭の子どもを対象とした活動を捉えられているが「子どもを中心とした地域の居場所」が実態を正しく認識している評価であると考えられる。

フィールドワークとして他大学の学生と交流し、学びの場を拓けることは、将来の方向について深く考える良い機会であり大きな糧になることと考える。

6. さいごに

美作大学食品ロス削減サークルの活動は、消費者庁のウェブサイトに掲載されています。

http://www.caa.go.jp/policies/policy/consumer_policy/information/food_loss/case/pdf/case_180628_0001.pdf ｱｸｾｽ日 2018/7/18

学生サークルが取り組む地域での食品ロス削減活動
(美作大学 食品ロス削減サークル)

管理栄養士や栄養士、保育士、幼稚園教諭を目指す学生たちが、サークル活動として、地域のフードバンクと連携したフードバンク活動などに取り組み、食品ロス削減の普及に貢献。

□ NPO法人フードバンク岡山と連携し、フードバンク活動で寄贈された食品の取扱いや仕分け作業を実施。これらの食品を活用して、「子ども食堂」を開催。また、サークルが独自にフードドライブ活動を行ない、地域の高齢者を対象にした「ほかほか食堂」を開催。

□ 子ども食堂やエコイベントでは、子どもたちが楽しく食品ロスの実態や食品ロス削減の大切さを理解できるように、「食品ロス削減かるた」や「食品ロス削減すごろく」、「食品ロス削減紙芝居」を作成し、活用

- 「ほかほか食堂」で送迎の高齢者の方に食品ロスの話とメニューを説明
- 「子ども食堂」でのお手紙 (メニューの考案や調理のお手伝い) (食後に手作りの紙芝居を実施)
- 「食品ロス削減かるた」や「食品ロス削減すごろく」を作成した様子

□ 学園祭での食品ロスとフードバンクのパネル展による啓発。

美作大学食品ロス削減サークルの活動は、卒業生が主催する「食育活動表彰のボランティア」部門で、「消費・安全局長賞」を受賞。

(食品ロス削減サークルの部長、副部長と顧問の塚田先生)

参考文献

- 1) 農林水産省 2015 年推計食品廃棄物の発生状況
- 2) 「広がれ、こども食堂の輪！全国ツアー」公式パンフレット
- 3) 『子どもの貧困白書』 明石書店 2017 年
- 4) Yahoo ニュース
<https://news.yahoo.co.jp/byline/yuasamakoto/20180403-00082530/> ｱｸｾｽ日 2018/7/25